

## 子どもたちの力に合わせる

富山大学教授

安藤

修平

## 一 基本的な考え方

何事もそうだが、「基本的な考え方」を確かめることが大切である。全体計画を考えるときも、学習活動を考えるときも、いつもこの「基本的な考え方」に立ち返ってほしい。この点、川嶋先生の「学習像を描く」は適切であり、ぜひ参考にしてほしいと思う。

## 二 教材選択と学習活動

教材選択については三者の違いが見えて興味深い。川嶋先生は、通し読み 学習活動のイメージ化 教材選択 学習活動。梶田先生は、新しく四教材を加えて五教材に 教材選択 学習活動。有村先生は、二教材の比べ読み 教材選択と学習活動の決定。

まず、教材の取り扱い方が見える。梶田先生は教科書教材にさらに教材を加えていくという方法を採用している。これは新しい方法だが、日ごろから鍛えている学級な

らではである。先生方には、子どもたちにとって負担にならないよう配慮しながらも、ぜひ果敢に取り組んでほしい。また、「読むこと」の学習がある程度した後、個を中心とした学習に入っていくか、通し読み程度で個の学習に入っていくか、の違いはあるが、できるだけ読みの一斉指導を控え、子ども自身が自分で選んだ学習活動を展開しながら読みを深めていくように指導してほしい。ペーパーサポートを正しく作るには本文を正しく読まなくてはならないのである。つまりこの活動の中に「国語の学習」が込められているのである。

## 三 自ら学ぶ力

「自分で選んで」のよさは、有村先生が最後の「四 授業を終えて」に「指導する方に不安が多く、とまどった。しかし、個人やグループで実に生き生きと活動している姿には、一種の感動さえ覚えた。何と今までの学習が制約の多いものであったか」とまとめておられることで尽きている。編集委員の私にとってもうれしい結果である。「自分で選んで」は難しいという批判もあるようだが、子どもたち「一人ひとりの力」に合わせて無理のない学習活動に取り組ませれば、子どもたちは、必ず生き生きと活動する。学習を終えた後の笑顔を想像しながら取り組ませ方を考えるのも楽しいではないか。